

地雷のない世界をめざして

—平和の種をまく高山良二さん—

地雷って、どんなものか知っていますか？ 地雷には、いろいろな種類がありますが、一番多いのは、地面の下に埋め、その上を人が歩くと爆発するしかけの地雷です。そのほとんどは、戦争のとき、相手側の兵士たちを傷つけることを目的としたものです。

現在、世界中で約7000万個ともいわれる地雷が埋められ、毎年多くの人たちが犠牲になっているのです。

2007年には、5462人けがをしたり、死んだりしました。

その中で一番多いのは、農作業をする人や子どもなど地元の人です。このように、地雷は、戦争が終わっても、いつまでも人々を苦しめているのです。

このような「悪魔の兵器」といわれる地雷をなくしようと、1997年「対人地雷全面禁止条約（オタワ条約）」を世界122カ国が調印しました。すなわち、それらの国では地雷を「作らない」「買わない」「持たない」ことが決められたのです。もちろん、日本もこの条約に入り、現在日本には地雷は1個もありません。

しかし、残念なことですが、アメリカ、ロシア、中国などの国は、この条約に入っていないのです。世界中のすべての国が一日も早くこの条約に入って地雷をなくして欲しいものです。



高山良二さん



地雷犠牲の子ども

日本から飛行機で、わずか6時間のカンボジアでは、20年前まで続いたベトナム戦争や内戦で約400万～600万個の地雷が道や畑に埋められ、そのため、カンボジアの人たちは、今も爆発とその不安に大変な苦しみを味わっています。

宇和島市出身の高山良二さんは自衛隊にいたころ、カンボジアの国連平和維持活動にたずさわりました。その間に高山さんが目にした戦争で荒れた田畑、貧しい生活、地雷への不安…特に10歳の子どもの火薬が残ったままの砲弾である不発弾

の誤った扱いから、目の前で爆死したむごい光景は深く心に刻まれました。

『カンボジアの人たちのために、私にできることはなんだろうか。』そのことが高山さんにとって大きな課題となりました。

2002年、55歳で定年退職した高山さんは、4日のちにはカンボジアの土を踏んでいました。そして、自衛隊で身につけた地雷処理をすることによりカンボジアの役にしたいと決意し、「地雷処理を支援する会」の一員として活動を始めました。

高山さんは、カンボジアの地雷処理は、カンボジア人自身が取り組むべきであるという考え方から、世界でも例のない「住民参加型地雷処理活動」を行うこととしました。

そのため、住民の中から選ばれた隊員は、地雷処理の方法や注意点を6週間学びました。地雷処理は、まず、幅1.5メートル、奥行き40cmの地面の草や木を刈り取り、次に金属探知器で地雷をさがす、金属があると音で反応します。その場合はくぎや小さな金属片でも反応するので、探知棒を使って用心深く探します。



金属探知器で地雷をさがす

地雷が見つかり、火薬をしかけて、みんなが遠くに離れ、遠隔操作で爆破します。

この場合人間の1億倍という嗅覚(においをかぎ分ける能力)がある地雷探知犬が活躍することもあります。とにかく、どの作業も少しの油断もできない命がけの作業であります。

高山さんにとって、2007年1月19日の事故は生涯忘れられないつらいものとなりました。対戦車地雷の処理のミスからカンボジア人の隊員7人が犠牲となりました。1年後に完成した7人の慰霊塔で「二度と事故を繰り返しません」と高山さんや隊員は誓い、地雷処理活動を続けています。

高山さんは、危険な地雷処理を行いながら、その合間にカンボジアの人々の生活をよくするために、いろいろな手助けをしています。



愛媛県の人たちの協力のできた井戸

その一つが井戸を掘ることです。カンボジアの農村には、水道や井戸がなく、雨水をためた池や川の汚れた水を生活用水として使っています。そのため、遠いところから運ぶ水汲み作業はたいへん苦しいものであり、しかも不衛生で、病気の原因にもなっていました。そこで、高山さんは愛媛県

の人たちにその様子^{ようす}を話し、井戸^ほを掘る工事^{こうじ}や手押しポンプ^{てお}の費用^{ひよう}の寄付^{きふ}をつのりました。多くの人の協力^{きょうりよく}により、2009年7月現在その井戸は73基^きとなりました。

また、地雷処理^{だいちりょ}をしている人口6000人のサマキ村には、学校^{がっこう}がありませんでした。そこで、高山さんは、小学校^とを作りたいと考えました。その話を聞いた東温市^{とおんし}の佐川^{さかわ}さんが協力^{きょうりよく}し、2008年4月に4教室^{きょうしつ}のサマキ・サカワ小学校^とが完成^{せいせい}しました。高山さん



は地雷処理^{だいちりょ}の厳しい作業^{さぎょう}の終わった夕方^{ゆうがた}、その小学校^とで日本語教室^{にほんごじょうしつ}を開き、熱心^{ねっしん}に教えています。

さらに、村の生活をよくするためには、村人^{みづか}自らが工夫^{くわ}し、努力^{どりょく}することが大切^{たいせつ}であると考え、「村からごみを0にしよう」運動^{うんどう}を呼びかけ、「ごみ箱^{ごみばこ}コンクール」を開いて、村人^{かんしん}の関心^{かんしん}を高めています。

子どもたちと高山さん

このように地雷の不安^{ふあん}をなくし、村を明るく元気^{げんき}にしようとしている高山さん^とに対して、

村人^{かんしん}たちは感謝^{かんしゃ}と尊敬^{そんけい}の気持ち^{きもち}をこめて「ターさん」と呼んでいます。その「ターさん」のまわりには、いつもカンボジアの子どもたちの明るい笑顔^{えがお}が取り囲^とんでいます。

高山さん^とから愛媛^{えひめ}の子どもたち^とへのメッセージ

「今の日本は、物や金の風船^{ふうせん}は大きくふくらんでいるが、心の風船^{こころのふうせん}はしぼんだままである。みなさんが、しぼんだ風船^{ふうせん}に空気^{くわい}を入れてほしい」

(高山さんが言われる「心」とは、どんな心でしょうか考えて下さい。)

◎参考にさせていただいた本

「地雷のない世界へ」 大塚敦子著 講談社

「オヤジたちの国際貢献」(1)(2)(3) 日本地雷処理を支援する会

◎ この資料作成のため、高山良二さん ご本人から直接お話を聞きしたり、写真やビデオを提供していただいたりしました。